

【研究論文】

アンヌ・エベールの『魔宴の子供たち』における
技法論
——括弧による挿入語句と客観的立場——

Étude du style dans *Les enfants du Sabbat*
d'Anne Hébert :
phrases entre parenthèses et situation d'impartialité

佐々木菜緒
SASAKI Nao

Résumé

Les enfants du Sabbat (1975) est un roman dans lequel Anne Hébert décrit, avec beaucoup de liberté, des valeurs et des normes sociales renversées dans tous les sens. L'histoire se déroule dans un Québec traditionnellement catholique, dans les années 1930 et 1940, lequel a été accentué et renforcé par un discours d'époque. Mais ce Québec sera perturbé par la présence de l'héroïne Julie, sorcière et religieuse à la fois, qui viendra entremêler le sabbat et l'Église, la magie noire et la religion, le désordre et l'ordre. Par ailleurs, les identités d'une Julie éduquée d'une part en sorcière et d'une autre en religieuse sont mêlées à travers des narrations temporellement et discursivement intriquées.

L'univers libre et carnavalesque propre au roman *Les enfants du Sabbat* se retrouve dans le style lui-même, notamment par des phrases ou des passages mis entre parenthèses. Ces insertions dans le texte exposent des voix sans parti pris et hors du texte, par lesquelles la société québécoise est librement observée et caricaturée. Nous parlons ici d'un style unique dans l'œuvre d'Anne Hébert, voire d'une rare joie de l'auteure tangiblement exposée dans le texte.

キーワード：アンヌ・エベール、『魔宴の子供たち』、文体、カーニヴァルの、喜劇性
Mots-clés：Anne Hébert, *Les enfants du Sabbat*, style, carnavalesque, comédie

はじめに

1975年に出版された『魔宴の子供たち』(*Les enfants du Sabbat*)¹は、1930～40年代のケベックを舞台に、魔女や黒魔術などの超自然的要素が登場する幻想的な小

説である。また、伝統的なカトリック信仰による社会形態が謳われた「暗黒時代」を背景に、主人公の魔女兼修道女ジュリの住む修道院の日常が、さまざまな怪奇現象のもと一変させられていくカーニヴァル的²な小説でもある。カトリック教会の厳粛なイメージは、ジュリに対する修道院側の右往左往した反応の描写をとおして、転倒されていく。そして、魔女として育てられたジュリと修道女としてのジュリのアイデンティティが錯綜する中で、魔宴と教会、黒魔術と宗教、野生と理性との相対的モチーフは入り乱れていく。このように、20世紀半ばまで色濃かったカトリック的ケベックのイメージは『魔宴の子供たち』において大いに戯画化されている。

実のところ、『魔宴の子供たち』は作者アンヌ・エベール (Anne Hébert : 1916-2000) がそれまでになく「自由気ままに (avec autant de liberté)」(Vallières, 1975, cité dans Hébert, 2014, p. 18)、社会的規範や価値観を多様に倒錯し、それらを織り交ぜながら書いた作品である。その創作動機として、1960年代以降の近代化運動の中で発展した知的文化 (culture savante) に対して、歴史に取り残された民衆文化 (culture populaire)、特に女性の社会的立場を象徴する魔女像をめぐる民衆の物語を描くことに対する関心があげられる (Saint-Martin, 1991)。そのために、『魔宴の子供たち』における悪魔や魔女、魔術などの幻想的要素は、近代以降のケベックの社会言説において不適当とされた民衆的な視点を生き生きと描く機能を果たしている (Couillard, 1980 ; Émond, 1984 ; Battha 2004)。固定されていたと思われた諸々のカトリック的軸は悪魔や魔女によって脅かされ、繰り返し「世界の秩序は転倒」(ES, p. 14) されていくのだ。

この同作品最大の特徴である自由と倒錯の世界は、テキストに頻繁にあらわれる括弧の使用からも読み取ることができる。『魔宴の子供たち』における括弧は伝統的ケベック社会の物語を客観視する者の存在を顕在化させ、括弧で挿入された語句は社会規範に従う者を茶化す働きをもっている。

従って、本稿は『魔宴の子供たち』における括弧の意味を明らかにしていくことを目的とする。本稿の構成は以下のとおりである。まず、『魔宴の子供たち』の特徴について、創作動機の観点から確認するために、出版時期 1970年代のケベックにおける主流な言説を概観しながら、創作時の作家エベールの置かれた状況を探る。次に、同作品において魔女の世界とキリスト教会が実際にどのように関係付けられているのか、社会価値の転倒がどう表現されているのかを検討する。そして、具体的なテキスト分析を3段階に分けて次の点を考察する。すなわち、括弧を用いて物語を客観的に見ている者を提示することに、どのような意味があるのか。括弧とおして軽口がたたかれる対象はどのような人物なのか。最終的に、括弧の意味を明らかにすることによって、新たに見えてくるエベールとケベックの関係を考察していきたい。

1. 1970年代の文学言説と『魔宴の子供たち』

『魔宴の子供たち』は、エベールがフランス移住後の1971年に執筆し始めた作品である。同作品の創作および出版時期の背景で重要なのは、前年の1970年に出版

した『カムラスカ』(Kamouraska)の大成功による興奮状態の冷めない中で生まれた作品であることと、そして1960年代後半のフランス移住から数年経ったときに構想された作品であること、この2点である。これらの点は、『魔宴の子供たち』が作者のどのような意味で「自由気ままに」(Vallières, 1975, cité dans Hébert, 2014, p. 18)書かれた作品であるのか、なぜ魔女によって伝統的価値観が倒錯される物語を描いたのかなどを考えるための足がかりになる。そこで、作家エベールの当時の置かれた状況について考えるために、ケベック社会における同作品の受容と当時の文学言説の関係を見ていく。

『魔宴の子供たち』は現在に至るまで大体において好評価を得ているが、他方でエベールの作品については珍しく辛辣な見解も見られる。例えば、同作品の原稿提出時、「山小屋や禁酒法の物語に〔フランスの〕スイユ出版社の編集者は面食らい」(Hébert, 2014, p. 79)、そこでの登場人物らは図式的で、諸々の総和は一面的と評される(Blaisy, 1975, cité dans Hébert, 2014, p. 80)。さらに、ケベックにおいては、『魔宴の子供たち』の舞台である「暗黒時代」ケベック社会の歴史的背景に関して詳しい説明が欠けているとして酷評される(Hébert, 2014, p. 81)。これらの批評の多くは作品の物語設定やモチーフ、主題に対するものである。その考えられる要因のひとつとして、ハンス＝ロベルト・ヤウス(H. R. Haus)の表現を借りれば、当時の「期待の地平」に答えるものでなかったことが挙げられる(ヤウス, 2001)。すなわち、前作『カムラスカ』につづく壮大な「ケベック物語」への期待や、ケベック文学の古典形成に一役を担うような神話的物語への期待である³。

事実、1960～70年代のケベック文学界は、「静かな革命」と称された一連の新しいネイション構築運動の下、古典群の形成に必死であり、時には躍起になっていた。けれども、ケベック文学史家マルティエヌ＝エマニュエル・ラポワント(Martine-Emmanuelle Lapointe)によれば、その時期から現在に至るケベック文学とは、結局のところ「記憶が形成されていく舞台である。[しかも]その記憶は、公共の場を横断した美学的、イデオロギー的勢力の中で翻弄され、変化しながら展開されたもの」(Lapointe, 2008, p. 8)なのである。要するに、「期待の地平」は堅固なものではなく、短期間のうちに生成し転換されていく言説の影響下で、激しく流動的な状態だった。例えば、レジャン・デュシャルム(Réjean Ducharme)の『飲み込まれた者に飲み込まれた娘』(*L'avalée des avalés*, 1966)のように、当時の「期待の地平を動揺させ、不意打ちし、大混乱におとし入れた」(Lapointe, 2008, p. 236)文学作品が度々登場している。そして、もしデュシャルムの作品が、主人公ベレニスに感情にまかせた独白形式と斬新な言葉遊びの融合によって、文学作品や作家の役割などに関するあらゆる伝統と規範からの断絶を象徴するならば、伝統的カトリック社会のタブーが魔女ジュリによって笑いとばされていくエベールの『魔宴の子供たち』は「期待の地平」に「予想外の大笑いのショット」(Bouchard, 1976, p. 375)を打ち込み、教会制度に関するあらゆるしがらみからの解放(liberté)を象徴する作品であると言える。

『魔宴の子供たち』に、伝統的価値に対する喜劇性(comédie)を見出すドゥニ・

ブシャール (Denis Bouchard) は、『カムラスカ』と同作品の相違点について次のように述べる。すなわち、前者から後者において「変わったのはアプローチである、つまり夫たちを何とか殺そうとする未亡人のしかめた顔の代わりに、諸々の神話に大きな笑いを授ける」(Bouchard, 1976, p. 374) アプローチへと変わったのだと。言うなれば、伝統的ケベック社会のイメージは、『カムラスカ』において息苦しいものとして表現され、『魔宴の子供たち』では嘲笑的なものとして扱われたのである。

この見解を掘り下げると、『魔宴の子供たち』を書いていた時のエバールの姿勢について、次のように考えることができる。つまり、悲劇小説『カムラスカ』からカーニヴァルの小説『魔宴の子供たち』へのアプローチの変化には、ベルクソンが主張するような「多くのドラマが喜劇と化す」ときの「超然とした態度」および「無関係な傍観者」(ベルクソン、2016、p. 15) 的立場が作家エバールに生じていたと考えられる。なぜなら、フランス移住前から構想を練っていた『カムラスカ』に対して、『魔宴の子供たち』は、作家が「自分にとっての本当のケベック」を描くために必要な「距離をもつこと、[ケベックの] 風景や町から自由であること」(Gauvin, p. 226) を可能にした移住後に、初めて書いた作品だからである。ケベックとの間に物理的距離に加えて時間的や心理的にも一定の距離感ができ、ケベックを客観的に見ることができた時に創作されたのが、『魔宴の子供たち』なのだ⁴。

では、実際に『魔宴の子供たち』において、どのようにカトリック教会を軸にした社会的制度や伝統的価値観からの解放が表現されているのか、次章で検討する。

2. 『魔宴の子供たち』における教会と魔女の関係

『魔宴の子供たち』では、現在の修道女ジュリのいる修道院と、過去のジュリが家族で暮らした小屋は相対する要素である。前者はカトリック信仰に基づいた文化体系を、後者は教会にとって絶対的「他者」である悪魔と魔女の世界を象徴する。現代のケベック文学にあらわれる魔女の意味について、ロリ・サン＝マルタン (Lori Saint-Martin) は、「伝統的な男性視点の想像世界、とりわけ教会の想像世界では、魔女は忌まわしく恐ろしい生き物で、呪いをかけ、黒魔術を行い、悪魔と姦淫する」(Saint-Martin, 1991, p. 68) 存在であると述べる。そのような教会と悪魔、伝統的ケベック社会と魔女、「公式的なもの」と「公式的なものの向こう側」(バフチン、1980、p. 12) の関係性のある『魔宴の子供たち』において、「掟」の存在はそれぞれの側の規範をあらわしながら、どの価値基準をめぐって相対しているのかを示している。

例えば、教会的に、従って社会的に禁断なものとした近親相姦は、『魔宴の子供たち』における「古代の掟」として、悪魔の世界での「魔法に関する根本的で厳格な掟」(ES, p. 159) である。同掟に従い、ジュリの母親フィロメヌは魔女として遂行すべく息子ジョセフとの姦淫の掟を試みる⁵。以下の引用は、最終的にフィロメヌが成し遂げられなかったこの掟を、ジュリが自分の息子と果たすと主張する場面である。

フィロメヌが失敗したあれに成功してみせる。息子と寝てやるわ。古代の掟はかくのごとく、最も偉大な魔術師という者は……。わたし、わたしは、ジュリ・ラブローズ別名トリニテのジュリ、それをやるわ。わたしは母親や祖母にも、恋人や魔女にもなるの、最も深遠な掟を取りもどすの、わたしの骨に刻み込まれた [掟を]。(ES, p. 229, 下線は筆者、以下同様)

カトリック教会が懸念する性的欲望の倒錯は、悪魔の世界では「古代の掟」であり「深遠な掟」として是認される。また、姦淫に関する掟のほか、薬草の知識や天候の読みなど正当な魔女になるために必要な「秘密」を掟に沿って母親から奪う「決まり」もあるように⁶、『魔宴の子供たち』における悪魔や魔女は、カトリック教会と反した法を持つものとして描かれている。そのために、ジュリの兄ジョセフが結婚することは、悪魔の掟ではなくて、カトリック信仰の教えのもとで健全な性的関係をもつことを意味するのだ：「さあ、彼 [ジョセフ] は今後この世界の悪い誘惑から守られているわ、みだらなもの全部静まった状態に、聖なるカトリック教会の掟に従って」(ES, p. 155, 傍点は筆者)。

けれども、こうした教会と悪魔をめぐる2つの世界はいつも隔てられて相対し合っているわけではない。徐々に前者は後者に影響をうけて、各自の抑圧されていた欲望があらわにされていく。その結果、起きるのは「すべての階層秩序的関係の廃棄」(バフチン、1980、p. 16)である。実際、ジュリの魔術を前に、他の修道女たちの敬虔で真面目で初心な様子は消えて、彼女らは私利私欲を求める人間として描かれる。例えば、会計係の修道女はジュリから煙草の吸い方を習った後、「うね織りのストックングをはいた萎びた脚をととも高い位置で組み」(ES, p. 197)ながら、傲慢な態度で、「偉い地位」(ES, p. 95)の修道院長への何の断りもなく、無駄遣いを働いて役職違反を犯す。さらには、他の修道女たちはジュリの不思議な魔力の噂を聞きつけて、個人的な願望を叶えてもらおうとする。その場面が、以下の引用である。

修道女たちは特に好んで夜に修道院の静寂をやぶることなくやってくる、立ち止まることさえもなく。彼女たちの歩調のわずかなゆるみがかろうじて廊下に。専心する時間。修道女たちは非常に小さい声で神か悪魔に頼み込んでいる。[神か悪魔か] 大したことじゃない。自分たちの言い分を聞いてくれて願いをかなえてくれさえすれば！あらゆることを捨てた者の飽くことのない渴望、不朽の奇跡を期待して。(ES, p. 183)

この引用で注目すべきは、修道女たちは自分たちの望みが聞き入れられるのであれば、祈る相手が神か悪魔かは重要としない点である。彼女らにとって大事なのは自分たちの要求が飲まれることであり、神への忠義は二の次である。しかも、絶対的に至上の存在の神は、ここでは悪魔と同列に扱われ、二者一揆されるものとして、その地位は下落されている。

『魔宴の子供たち』では、このように魔女を前に、カトリック信仰にまつわるテーマや役割が倒錯され、神であっても聖職者であっても厳粛なイメージが取り除かれ、表の世界と裏の世界は重なりあっていく。そして、ケベックの知的文化と原始文化がそのように転倒される同テキストにおいて、しばしば現れる括弧は、その状態を客観的に見ている者がいることを示しているように思われる。この点について、次章で検証する。

3. 括弧による相対的視点の顕在化

最初にテキスト上の括弧について言えることは、中心のテキストと区別するための記号であることである。括弧には、周りにある文体と一体化されることを拒みながら強調する機能がある。ミカエル・リファテール (Michael Riffaterre) は、文体を「知覚されることを強要する形式」(リファテール、1978、p. 46) と捉えて、「その文体の知覚を可能にするのは、まさしくずれであり、距たりである」(リファテール、1978、p. 46) と説明する。この意味で、括弧の使用は他のエペールの作品テキストとの差異を示していることから、『魔宴の子供たち』固有の文体である⁷。それと同時に、括弧で囲まれたテキストは否応なく前後の文との距離を表現す文体の一つとして捉えられる。そして、括弧で示された距離感は、多くの文学作品において物語に対する第三者的な視点と結びついている。

例えば、イギリス人作家チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens) の『大なる遺産』(*The Great Expectations*) のテキストにも括弧による挿入語句が高い頻度で見られる。この場合の挿入語句は、物語の語り手である主人公が過去の自分を回想する中で、随所に出来事や登場人物の行為について補足や注釈する働きをもつ。「[括弧の] 挿入によって皮肉な口調」(斎藤、1983、p. 171) をあらかず語り手は、物語の中心である過去の自分に対して、第三者的、優越的、反省的な立場にいることを強調するのである。そこで、『魔宴の子供たち』においても括弧の使用が、どのように出来事や登場人物について補足、注釈しているか確認したい。

山小屋はそれほど大きくない、[それは] 分厚い木の塊のようなひっきりなしに継ぎ足した板からなっていて、[その継ぎ足した板は] 森に半分隠れた状態で、それぞれ異なった高さで取り付けられており、多少まっすぐに [取り付けられて]、全体的につなぎの悪い状態で、大きな岩の上に [つながれ]、それはピロティ式にとって代わるもの。主な塊 (長さ 15 フィートに幅 12 フィート) は扉の部分であるのが分かる、その扉は以前は赤色だったが今では紫色とピンク色である。(ES, p. 86)

壁の白い月 (フィロメヌが普段自分の青い帽子をひっかけるあそこ) はふくれあがり、母のたくましいお腹の部分の厚みが増している。(ES, p. 135)

ジェマ修道女は、ジュリが大きな叫び声を上げたと言いつ張っている、蛇口の冷

たい水の中から手を引っ込めながら、野菜を洗っていたその水の中から。週の
間中、復活祭の日曜日（ジョセフからの手紙が郵送される日）まで、ジュリ修
道女の両手のひらには腫れ物ができていた。（ES, p. 147）

自宅に戻ると、ジャン＝パプティスト・ポーモンはガラスの壺（小屋からもつ
てきた壺のうちの1つ）を油で一杯にする。そこにランプの灯芯を入れる。そ
のように用意した壺を灰色の布地でできた肩掛け鞆の中にしまう。肩に鞆をか
けて、用心して歩きながら、Bの山に向かう。（ES, p. 180）

どの場合でも、ある物事をよりよく理解させるために補足情報が提供されている。
最初の引用は、山小屋を記述する中で、具体的な数値による補足であるし、2つ目
の引用では、壁について「どの壁か」の特定が、物語をとおして読み手がすでに
知っている情報を用いながら、確認のように付け加えられている。その次の引用は、
後で話題となる事件を予測しながらイースターという日の前触れである。最後の引
用においても、村人が使用するガラスの壺について、すでに語られた出来事を引き
合いに出して説明されている。特に最後の2つの引用のように補足可能であるのは、
物語をすでに知っているからであろう。すなわち、『大いなる遺産』での括弧によっ
て、進行する物語を眺めている「未来の語り手」がいることが示されるように、『魔
宴の子供たち』においても、括弧の第1の機能は物語と距離を持った者、言い換え
れば、物語を掌握した者がいることを露わにすることにある⁸。では、そうした者
の存在を示すことにどのような意味があるのだろうか。

バフチンは、真の小説文体であるための要件として、作者のことばとテキストの
間に知覚可能な境界線は存在しないと主張する（バフチン、1979）。テキストに括
弧があらわれることは、「直線的で純粋な作者のことばの小島をはっきり際立たせ
ること」（バフチン、1979、p. 92）になるからである。この観点から見ると、括弧
によって事の顛末を知る者の存在をはっきりと目立たされた『魔宴の子供たち』
テキストは真の小説文体とは言えないということになる。あるいは、チャーホフの作
品に見られる括弧が「作者の側からのアクセント付けや作為性が強調された、きわ
めて説明的な表現方法」（長野、1991、p. 80）と前向きに解釈されるように、エペ
ールの作品でもテキストや物語の作為性が積極的に示されているとも言える。

『魔宴の子供たち』におけるこの作為性をめぐる問題について、中心テキストに
付属した参考文献目録の存在に目を向けて考えてみたい（ES, p. 241）⁹。これは作
者が『魔宴の子供たち』を創作する上で魔女や黒魔術に関する参考、参照した主な
文献である。この部分は、作品のタイトルと同じように、読み手の意識にさまざま
な作用を及ぼす「パラテキスト」として扱うことができる（ジュネット、1995）。
同パラテキストについて強調したいのは、作者が「何かの調査や資料に基づいて」
創作した「姿勢」が表明されていることである。それは、『魔宴の子供たち』が純
な空想物語ではなくて、何かしらの公式な根拠ロマンエスに基づいて練られた仮説のような物
語として提示しようとする姿勢とも言える。空想的な気持ちではなくむしろ冷靜的

な視線で書いたと。そうした物語に対する作者の冷静で客観的立場が、テキスト上の括弧の使用においてもあらわれているのだ。従って、同作品を、言わば正統な意味で単純な幻想的物語であるとも、またカトリック教会制度に関する直接的な社会批評であるとも一概に評すには、不自然なテキストなのである。

4. 括弧の茶化しとしてのコメント機能

第2章でみたように、修道院が象徴する文明が、小屋が象徴する原始文化によって倒錯されるカーニヴァルのテキストにおいて、「階層秩序的関係」を軸にして価値が相対化されているように、括弧に備わった相対的な視点は、補足または説明する対象の価値を倒錯させる性質をもつと考えられる。それは、物語を第三者的に見る者の余裕から生まれる遊び心からきているようにも思われる。ベルクソンの表現を借りれば、「平静な精神の表面に落ちてくるような」(ベルクソン、2016、p. 15)可笑しさと関連している。

以下に、そうした遊びが感じられる箇所を4つ引用する。

マリ＝クロティルド修道院長は確信したままである、悪魔が家に侵入したのだと。彼女はそれをどう追いついたらいいのか分からず(むしろ、そうする勇氣がない)、修道院の整理整頓された記録資料のなかからジュリ修道女のファイルをもなしく探している。(ES, p. 143)

ジュリ修道女の食餌療法、医者処方と修道院長の提案による療法は、塩や砂糖の入っていない、とても白い色をした乳製品だけである。保健係の修道女(けど、それは温和な性格と想像力の欠如で選ばれた係)はジュリ修道女のまだ新しいかすり傷を洗い流すために使うタオルを、うやうやしく保管している。(ES, p. 185)

フラゴール司祭は、修道女たちに起こっていることを報じるのが早すぎないか心配している。危険を冒さないこと、もう2度と、医者や修道院長たちに気がい者とかノイローゼとして扱われないように。ジュリ修道女が完全に取り憑かれるまで放っておいた方がいいのではないか、教会の上層部の連中に知らせるのは。秘密を守ること、たった1人で耐えること(マリ＝クロティルド修道院長とパンシヨ医者の頼りない手助けとともに)(ES, p. 189)

会計係の修道女(身の回り品に関してには天才的だけど、その他もろもろにはぼんやりしている)はがんばってジュリ修道女を世話し監視している、担当をはずされた保健係の修道女に代わって。(ES, p. 196)

第1の引用は修道院長の悪魔払いに対する姿勢について、第2の引用は1人の修道女が保険係に選ばれる根拠に関して、第3の引用はジュリに対する司祭の対応策に

対して、そして第4の引用は会計系の修道女の能力及び従順な性格についての補足コメントである。それらの補足は、各聖職者の能力及び役職に関して付けられており、彼らの真面目な面を茶化している。

上記4つの引用を通して指摘すべきは、括弧によってコメントを付された対象が、いずれも伝統的ケベックの社会階層の上段を占める聖職者である点である。彼らに対するコメントで可笑しさが生まれるとすれば、それは司祭や修道女など特定の社会的地位のある職業者が、コメントの付記によって、「妄想家、熱中者、狂人という奇妙なほど理屈っぽい連中」(バルクソン、2016、p. 31)として扱われているためである。そこで茶化されているのは、明らかに「単純な行為のもつ物質性の虜になり、催眠術にかかったように根源的な放心におちっている」(バルクソン、2016、p. 31) 聖職者たちを生み出す教会制度なのである¹⁰。

また、括弧のコメントによって可笑しく感じられるのは、その内容が括弧より先に書かれた内容に対して否定的なものであるからである。上記の引用の括弧では、「むしろ (plutôt) や「けど (pourtant)」の否定的表現から始まるものや、「たった1人で (tout seul)」に対して逆の意味の「一緒に (avec)」が見られる。仮に、「読書の快楽は (...) 敵対するコード (例えば、高貴なものとは卑俗なもの) が接触する」(バルト、1999、p. 12) のだとすれば、『魔宴の子供たち』においては括弧の前後での肯定と否定の接触、ある意味で持ち上げて見下す価値が隣り合わせであるところに、読み手の意識に心地よく楽しい状態が生まれるのである。

このようにして、茶化された司祭や修道院長、修道女たちの英雄的で敬虔的な存在感は、悪魔や魔女に対抗する勇気のない頼りない人間へと転倒している。従って、『魔宴の子供たち』では修道女たちに日々の命令 (ordre) を下す修道院長や、カトリックの教えの遂行のために指示 (ordre) を与える司祭たちの社会的地位とあるべき人格の関係の絶対的価値は失われているのである。

5. 括弧の使用にあらわれるジュリと社会規範の関係

社会学的観点の研究にとって、『魔宴の子供たち』の幻想的性質は、20世紀半ばからの知的階層による近代化が進んだケベックにおいて、「不確かで混沌とした日常から生じた恐怖感や無秩序への美学的な反応」(Batalha, 2004, p. 143)として解釈されてきた。ジュリをはじめ悪魔一家は、ケベックの土着の民衆文化の生命力や活気を体現し、社会的に抑圧されている思考を暴き、表と裏の境界を乱そうとする者なのである。それゆえに、本稿でもこれまで見てきたように、魔女や魔術を中心とした既成価値の倒錯がいたるところで描かれているのだ。

けれども、ジュリと教会制度、ジュリと悪魔の世界の関係はそれほど単純ではないようである。というのも、先述のような茶化しの意味で使われている括弧の使用は、教会側の人物だけでなく、ジュリの場合にも認められるからである。以下は、悪魔の世界を象徴する小屋から逃走後、カトリックに改宗した兄ジョセフにジュリが川で洗礼を施される場面である。

ジョセフの魅力というのはこんなよう、首に紐をかけられて「絶望的な状態に」、ジュリは兄に強く勧められたライバルの魔術に屈服するしかできないような。(またはそれに屈服するふり。)彼と一緒に天使になること。彼のために(または天使になる見せかけ。)改宗すること。(ES, p. 208)

この引用の中で接続詞「または (ou)」を用いて茶化されているのは、洗礼にしかるべき純真な姿勢と、ジョセフに対するジュリの純粋な気持ちである。これらのイメージは、括弧のコメントによって、繕った偽物と化している。修道院に入るきっかけになったこの洗礼の出来事をおして、修道女としてのジュリの虚像が表現されているのだ。あくまで、悪魔の世界と逆に位置するキリスト教会は偽善的な世界であり、修道女ジュリとしてのアイデンティティは自身の願いを叶えるための道具でしかない。教会制度は私的目的で利用されているのである。

さらに、同引用の括弧において興味深いのは、ジョセフを一心に想うジュリの気持ちが茶化されていることである。ジュリが「自分の自由が朽ちていく修道院」(ES, p. 99)の中で耐えることは、「彼[ジョセフ]の代わりに捕らわれた身」(ES, p. 99)であること、つまりは彼への愛のためのみである。彼女が教会の規則に従い、その世界の法に耐えているのは、ジョセフの気持ちに応えたいためである。従って、不順な動機のもと修道女になったジュリが、他の聖職者たちに偽善的な「服従や従順」(ES, p. 97)を見るのは自然なことだろう。しかし、そうしたジュリの愛ゆえの犠牲もまた滑稽であるかのように描かれている。

けれども、よく考えるとジュリが従っているのはカトリック教会の規範に関するものだけではない。先述したように、諸々の法や掟があるのは教会側だけではなく、悪魔の世界にも等しくある。『魔宴の子供たち』における悪魔の世界は単なる野蛮や混沌で、無秩序なものではなく、教会制度が退けてきた価値観、とりわけ諸々の欲望に関して一定の法を定めた一文化体系としてあらわれている。幾度もジュリの両親が悪魔の「掟」を遵守しようと試みるのと同じように、ジュリも立派な魔女になるために「掟」を受け継いでいくことを主張している。どちらの世界であっても法や秩序を守ろうとする強い姿勢がみられるのである。

このように考えると、悪魔の世界であっても「掟」にこだわりをもつジュリもまた滑稽な存在と言える。彼女は、聖職者たちが「聖なるカトリック教会の教え」(ES, p. 155)に服従しているように、「古代の掟」(ES, p. 229)に服従しているのである。つまりジュリもまた聖職者たちと同じく「催眠術にかかったように根源的な放心」(ベルクソン、2016、p. 31)状態の者である。ということは、『魔宴の子供たち』においては、教会側や悪魔側、どの世界であれ一定の秩序に縛られている状態そのものが問題なのではないだろうか¹¹。

おわりに

本稿は、『魔宴の子供たち』のテキストにみられる括弧を文体的特徴として捉えて、括弧の具体的な機能と、括弧によって挿入された語句の意味を明らかにした。

すなわち、括弧は客観的に物語を見る者の存在を物質化し、作品の幻想的モチーフや社会的主題を中性化させていること、そして『魔宴の子供たち』における社会規範の転倒は茶化されながら行われていることが、括弧によって挿入された語句から明らかになった。さらに、括弧をとおして規範に従属する人物への茶化しは、主人公ジュリに対しても行われていることが分かった。この分析から、教会の世界であっても悪魔の世界であっても、法や規則に縛られている人物像が示された。

以上により、『魔宴の子供たち』は、教会が象徴する知的文化と魔女らが象徴する原始および庶民文化の価値を対比させて転倒させているだけでなく、どの種類の文化や社会形態にも存在する規範的なものについて問いかけた作品であると言える。言い換えれば、特定の社会を特徴づける行動様式や思考傾向などの価値付けではなくて、一定の規範からなる社会の中で生きる人間の様相が問題なのである。『カムラスカ』において社会規範が個人を抑圧する様相を描くために扱われた伝統的ケベックは、『魔宴の子供たち』では社会規範が個人の世界観に与える影響を描くための舞台となったのである¹²。それを可能にしたのは、作者エペールが生まれ育った伝統的なカトリックのケベックについて、歴史的、社会的、文化的に、相対的な視点で捉えることができるようになったフランス移住である。『魔宴の子供たち』はその移住から数年後の1970年代に、ケベック社会に対して自由な視点で創作された作品なのである。

(ささき なお 明治大学大学院博士後期課程)

注

- 1 本文中の引用は全集に準拠し、ESと記す。
- 2 本稿において「カーニヴァル」は、ミハイル・バフチン (Mikhail Bakhtin) の考えにならない、社会的秩序の場において、民衆の騒ぎと笑いの介入によって上層と下層の立場が転倒し、双方の境界が錯乱していくことを意味する (バフチン、1980)。
- 3 1960年代以降のケベックでは、他のアメリカ大陸文学やポストコロニアル文学と同じように、自分たちの歴史再構築を目的に、神話や伝説を意識した作品のほか詩が盛んに生まれていく。しかし、そうした叙事詩的作品は、当時の現実とはかみ合わず、結局のところ「墮落し、遊び道具や小説になる」(Nepveu, 1999, p. 21)。伝統的ケベック家族像を反理想化して描いたマリー＝クレール・ブレ (Marie-Claire Blais) の『エマニュエルの人生の一季節』(*Une saison dans la vie d'Emmanuel*, 1965) はその代表例である。
- 4 一方で、作家エペールと1960～70年代のフランスやフランス文学との関係についても考慮する必要があるが、詳細は現在調査中である。1つは、フランスの批評家は、エペールのエクリチュールに「とりわけフランス文学の伝統の充実を図る上で値する」(Gérols, 1987, p. 53) のを見出し、かつそれがケベックやカナダが舞台の異国性と融合している点を評価していること。2つ目は、エペールは、「自分の作品を読む大多数の読者がケベックの人である」ことを自覚していたことから、作品を執筆する際より意識されたのはケベック文学方面だと考えられる。3つ目は、作家人生のなかで親し

んだ世界の様々な古典文学の影響はエベール全作品にみられる。一方、「同時代のブレヤドゥシャルム、ヴィクトール＝レヴィ・ポーリュウ（Victor-Lévy Beaulieu）などのケバック作家の作品には感銘をうけたが、本当の意味で彼らから影響を受けるには読むのが遅すぎた」（Watteyne, 2008, p. 65）と指摘されている。一概には言えないが、当時のケバック文学の影響が2次的であるのと同じように、当時のフランス文学の影響もまたそうである可能性がある。

- 5 フィロメヌスが息子ジョセフと姦淫の掟を守る重要性を説く場面が、次の引用である：「*Telle est la loi, afin que naisse, du fils et de la mère, le plus noir génie jamais promis au monde. La possession de la terre sera pour ce fils unique.*」（ES, p. 169, nous soulignons）。
- 6 次の引用が、母親から魔女として知識を継承することをジュリが主張する場面である：「*Je lui prendrai tous ses secrets : telle est la loi. La recette de la bagosse, des herbes et de l'onguent, l'art de dire le temps qu'il fera, celui de brasser l'eau pour faire la grêle, le pouvoir de faire virer le vent de bord, la possibilité de changer la colère en foudre et en tempête, l'audace suffisante pour lâcher, les soirs de pleine lune, dans le creux d'un ravin, toute une cohorte de danseurs hallucinés, bravant, tous ensemble, les édits du diocèse, comme on passe de l'autre côté du monde*」（ES, p. 173, nous soulignons）。
- 7 リファテールの考えに沿って、文体を知覚的に捉えることが可能であるとするならば、「エベールの文体」とは（1）反復（2）不定詞、（3）主語の不在、などの特徴に集約される。これらの特徴が全体的にエベールのどの作品にも認められる一方で、括弧の多用が見られるのは『魔宴の子供たち』のみである。
- 8 本稿での引用以外に、括弧の前の表現や内容を説明的に言い換えた箇所は、p. 167 や p. 171 など多数。
- 9 物語が終わった最後の頁に記載された参考文献は以下のとおり、「*OUVRAGES CONSULTÉS : Robert Mandrou, Magistrats et Sorciers en France au XVII^e siècle, Paris, Plon, 1968. ; Robert-Lionel Séguin, La Sorcellerie au Québec du XVIII^e au XIX^e siècle, Montréal, Éd. Léméac, 1971. ; François Ribadeau-Dumas, Les Dossiers secrets de la sorcellerie et de la magie noire, Paris, Belfond, 1971. ; Julio Caro Baroja, Les Sorcières et leur monde, Paris, Gallimard, 1972. ; Justine Glass, La Sorcellerie, Paris Payot, 1971. ; Jules Michelet, La Sorcière, Paris, Garnier-Flammarion, 1966. ; Les Sorcières, Paris, exposition à la bibliothèque nationale en 1873*」（ES, p. 241）。なお、『魔宴の子供たち』テキストの特徴について付け加えるならば、この参考文献目録の存在も同作品にしか見られない。
- 10 『魔宴の子供たち』において、聖職者同様に制度的要素として、括弧の挿入語句により茶化されているのは医者ジャン・パンショである（ES, p. 191）。彼は司祭や修道女と同じく一定の枠組みのなかで世界を見る者として描かれている。もし教会制度が黒魔術と対な存在であるなら、医療制度はその双方をひっくるめた宗教全般に対する合理性として解釈できる。あるいは、近代的医療が登場して以降、医者の多くが男性であるのに対し、薬草などの知識をもとに治癒にあたった女性が魔女と呼ばれるようになった背景から、『魔宴の子供たち』におけるパンショとジュリの関係は、科学と文化、男性と女性の問題を象徴していると考えられる。なお、引用以外で茶化しのコメントとしてあらわれている箇所は、p. 121 や p. 157, p. 194 や p. 225 など。
- 11 実は、ジュリの父親で悪魔のアデラルと、母親で魔女のフィロメヌに対しては、茶化しの意味での括弧は使われていない。これは、教会と一切関係を持たない両親と

異なり、修道女でも魔女でもあるジュリをとおして、教会と悪魔の両方の世界における規範への服従自体が相対化された問題であることをあらわしている。

- 12 『魔宴の子供たち』をとおして、諸規範と人間の思考や解釈との関係に作者が関心を示していたことは、物語の結末について述べた次のインタビューからの引用にもあらわれている。「もし悪魔を信じる人なら、ジュリを待っていたのは悪魔だと言うことでしょうか。もし精神分析を信じるなら、それは幽霊だと言うでしょうし、地に根ざした現実主義者であれば、それは恋人だと単純にそう言うでしょうね」(Dubé, Émond, Vadendorpe, 1978, cité dans Hébert, « note 139 », 2014, p. 240)。

参考文献

- ロラン・バルト (1999) 『テキストの快楽』 沢崎浩平訳、みすず書房。
- ミハイル・バフチン (1970) 『フランソワ・ラブレーの作品と中世・ルネッサンスの民衆文化』 川端香男里訳、せりか書房。
- (1979) 『小説の言葉—ミハイル・バフチン著作集⑤』 伊藤一郎訳、新時代社。
- Batalha, Maria Cristina (2004) « Le fantastique et l'enjeu identitaire dans *Les Enfants du sabbat* », *Le fantastique francophone*, Ellug, pp. 141-154.
- アンリ・ベルクソン (2016) 「笑い：おかしさの意義についての私論」 アンリ・ベルクソン、ジークムント・フロイト 『笑／不気味なもの』 原章二訳、平凡社ライブラリー、pp. 9-203。
- Blais, Marie-Claire (1991) *Une saison dans la vie d'Emmanuel*, Boréal.
- Bouchard, Denis (1976) « *Les enfants du Sabbat* d'Anne Hébert : l'enveloppe des mythes », *Voix et images*, vol.1, n° 3, avril.
- Couillard, Marie (1980) « *Les Enfants du sabbat* d'Anne Hébert : un récit de subversion fantastique », *Incidences*, vol. 4, n° 2-3, mai-décembre, pp. 77-83.
- ディケンズ (2005) 『大いなる遺産』 (上) (下) 山西英一訳、新潮文庫。
- Ducharme, Réjean (1966) *L'avalée des avalés*, Gallimard.
- Gauvin, Lise (1997) « Une entrevue avec Anne Hébert », dans Madeleine Ducrocq-Poirier, *et al.* (dir.), *Anne Hébert, parcours d'une œuvre*, Montréal, l'Hexagone, pp. 223-228.
- Gérols, Jacqueline F. (1987) « La critique française et le mythe canadien : Anne Hébert », *Présence Francophone*, n° 30, pp. 51-58.
- ジラール・ジュネット (1995) 『パランプセスト：第二次の文学』 和泉涼一訳、水声社。
- Hébert, Anne (2013) *Œuvres complètes d'Anne Hébert, vol. II Romans (1958-1970)*, *Les Chambres de bois*, édition établie par Luc Bonenfant, suivi de *Kamouraska*, édition établie par Anne Ancrenat et Daniel Marcheix, Presses de l'Université de Montréal.
- (2014) *Œuvres complètes d'Anne Hébert, vol. III Romans (1975-1982)*, *Les Enfants du Sabbat*, édition établie par Mélanie Beauchemin et Lori-Saint Martin, suivi de *Héloïse* et *Les Fous de Bassan*, édition établie par Lucie Guillemette, avec la collaboration de Myriam Bacon, Presses de l'Université de Montréal.
- Lapointe, Martine-Emmanuelle (2008) *Emblèmes d'une littérature : Le Libraire, Prochaine épisode et L'avalée des avalés*, Fides.
- Munley, Ellen W. (1991) « Spatial Metaphors in Anne Hébert's *Les enfants du sabbat* : Within and

- Beyond the Confines of the Convent, the Cabin, and the Quotidian », *Dolphin*, vol. 20, pp. 55-66.
- Nepveu, Pierre (1999) *L'Écologie du réel : Mort et naissance de la littérature québécoise contemporaine*, Boréal.
- 長野俊一 (1991) 「後期チェーホフの語りの構造—『イオーヌイチ』を中心に」『東洋と西洋の短編小説の系譜に関する研究』岩手大学人文社会科学部, pp. 71-88。
- Paterson, Janet (1986) « Parodie et sorcellerie », *Études littéraires*, vol. 19, n° 1, printemps-été, pp. 59-66.
- リファテール・ミカエル (1978) 『文体論序説』福井芳男、宮原信、川本皓嗣、今井成美訳、朝日出版社。
- Saint-Martin, Lori (1991) « Écriture et combat féministe : figures de la sorcière dans l'écriture des femmes au Québec », *Québec Studies*, n° 12, pp. 67-82.
- 斎藤兆史 (1983) 「ディケンズの文体研究序説」『リーディング』第4号、大学院英文学研究会 (東京大学)、pp. 163-180。
- Sirois, Antoine (2006) « Anne Hébert et la Bible (1988) », dans Janet M. Paterson et Lori Saint-Martin (dir.), *Anne Hébert en revue*, Presses de l'Université du Québec, pp. 79-92.
- Vanasse, André (1982) « L'écriture et l'ambivalence, entrevue avec Anne Hébert », *Voix et images*, vol. 7, n° 3, printemps, pp. 441-448.
- Watteyne, Nathalie (2008) « Les lectures d'Anne Hébert », *Les écrits*, n° 123, pp. 53-73.
- H. R. ヤウス (2001) 『挑発としての文学史』響田収訳、岩波現代文庫。

付記：本稿は2015年度小畑ケバツク研究奨励賞を得て、モンレアル大学付属 CRILCQ にて実施した現地調査活動の成果の一部である。